

日本の高等教育の課題と可能性 ―人材育成の視点から―

上智大学学長 曄道佳明 てるみちよしあき

- * 学びの測定効果は難しい
- * 「教養は力である」という認識が弱い
- * 乏しい社会の共通認識
- * 結果が動機に転倒
- * 大学では個性を磨く
- * 情報の到達性が画一性を生む
- * 情報自身は知識でも智慧でもない
- * 学びを自分でデザインする場所
- * 上智大学の学びの挑戦
- * 大学が果たす役割とは



山縣 それでは開会いたします。（拍手）

先生のご紹介をさせていただきます。本日は上智大学の学長をなさっています曄道佳明先生にお越しいただきました。

個人的なことですが、先生も私も慶應義塾の附属の高校の卒業生で、たまたま偶然知ったんですけれども、先生は高校で野球部で、私はグラウンドホッケー部において、グラウンドが隣り合わせの一緒のところにあるんです。両グラウンドの真ん中に水飲み場があり、グラウンドホッケーの人間も、野球部の人間も、のどが渇くとそこに集まりますので、この二つのクラブは非常に仲がいい。昔話をちよつとさせていたいた次第ですが、もちろん、先生は私よりはずつと若く、私が高校生のときはまだ入学されてい

ません。

先生はその後、理工学部に入られ、修士課程を修了され、博士号を取られる。三菱電機にもご入社になって、いわゆる学者ではない道もご存じということであります。東京大学生産技術研究所で助手をなさって、その後、上智大学に転じて、理工学部で教授をなさっていました。

大学の運営では、学生センター長、入学センタ―長、それから副学長も務められて、学長にご就任ということでございます。

学長は2期8年も務められ、ちょうどこの3月31日にご退任ということで、本当にお忙しい現役の学長のときに来ていただいたということです。伺いますと、本日が学長時代の外部での最後のご講演になるということでございます。